

幕末明治の写真師列伝 第二十五回 下岡蓮杖 その二十四

内田魯庵は、『思ひ出す人々』（春秋社、大正14年6月初版、初出：『きのふけふ』（博文館、大正5年3月）の「八 浅草生活 大眼鏡から淡島堂の堂守」で、「この淡島堂のお堂守時代が椿岳本来の面目を思う存分に発揮したので、奇名が忽ち都下に喧伝した。当時朝から晩まで代る代るに訪ずれるのは類は友の変物奇物ばかりで、共に画を描き骨董を品して遊んでばかりいた。大河内子爵の先代や下岡蓮杖や仮名垣魯文はその頃の重なる常連であった。参詣人が来ると殊勝な顔をしてムニャムニャムニャと出放題なお経を誦しつつお蟬を上げ、帰ると直ぐ吹消してしまう本然坊主のケロリとした顔は随分人を喰ったもんだが、今度のお堂守さんは御奇特な感心なお方だという評判が信徒の間に聞えた。椿岳が浅草に住っていたは維新後から十二、三年頃までであった。この時代が最も椿岳の奇才を発揮して奇名を売った時で、椿岳と浅草とは離れぬ縁の聯想となった。浅草を去ったのは明治十二、三年以後で、それから後は牛島の梵雲庵に梵唄雨声と琵琶と三味線を楽んでいた。」と、淡島椿岳の元へ蓮杖がよく来ていたことを書いている。

また、同書の「浅草絵と浅草人形」では、「椿岳のいわゆる浅草絵というは淡島堂のお堂守をしていた頃の徒然のすさびで、大津絵風の泥画である。多分又平の風流に倣ったのであろう。十二枚袋入がたった一朱であった。袋の文字は大河内侯の揮毫を当時の浅草区長の町田今輔が彫板したものだそうだ。慾も得もない書放しで、微塵も匠気がないのが好事の雅客に喜ばれて、浅草絵の名は忽ち好事家間に喧伝された。が、素人眼には下手で小汚なかったから、自然粗末に扱われて今日残っているものは極めて稀である。椿岳歿後、下岡蓮杖が浅草絵の名を継いで泥画を描いていたが、蓮杖のは椿岳の真似をしたばかりで椿岳の洒脱と筆力とを欠き、同じ浅草絵でも椿岳のとは似て非なるものであった。が、その蓮杖も二、三年前故人となって、浅草絵の名は今では全く絶えてしまった。椿岳の浅草人形というは向島に隠棲してから後、第二博覧会の時、工芸館へ出品した伏見焼のような姉様や七福神の泥人形であって、一個二十五銭の札を付けた数十個が一つ残らず売ってしまった。伏見人形風の彩色の上からニス塗ったのが如何にも生々しくて、椿岳の作としては余り感服出来ないものである。が、椿岳の奇名が鳴っていたから、椿岳の作といえど何でも風流がってこの人形もまた相応に評判されたもんだ。今でも時偶は残っていて、先年の椿岳展覧会にも二、三点見えたが、椿岳の作では一番感服出来ないものであった。尤もニスを塗った処が椿岳の自慢で、当時はやはり新らしかったのである。」と記している。

また写真史家でもあった内田魯庵の『バクダン』（春秋社、大正11年）は、大正9年12月15日から翌大正10年4月24日まで『読売新聞』で連載された随筆を集めたものであるが、「早取写真」（大正10年2月24日、25日付『読売新聞』で掲載）で、明治14～15年頃の浅草奥山での写真館の様子や早取写真の江崎礼二のことなどを記している。

「(前略) 其頃奥山は写真師の巢であつた。今の瓢箪池の附近は写真屋小路であつた。東京人は明治十四五年頃には最早写真を夫程不思議がりもしなかつたが、江戸時代から浅草の得意とする田舎

の見物左衛門にはマダ其頃は写真が一つの魔術であつて、奥山で写真を撮るのは見世物を見ると同じ好奇の気分を伴つてゐた。随つて浅草での写真撮影は東京見物の日程の一つであつた。丁度今の六区の活動写真街のやうに当時の奥山には写真屋が並んでゐて、門並の青いペンキ塗の洋館擬ひが今の活動小屋の電光飾よりも田舎者を感じさせた。然ういふ時代であつたから江崎の看板にした赤ん坊の写真は今の活動写真よりもヨリ以上に田舎者をブツ魂消さした。(後略)」と、当時の浅草奥山の様子を記している。

幸田露伴は『下岡蓮杖の思ひ出』（河出書房、昭和27年：初出・雑誌『黒船』、昭和3年）で、「記憶は甚だしく朦朧となつてゐる。何でも五十余年前の事では有り、別に深く注意しめせず、随つて直ちに記しとゞめて置いたのでも無いのであるから、旧夢の痕を模するやうな覚束無いことである。が、自分が下岡蓮杖老人を、これも今は数年前に物故した淡島寒月氏に誘はれて浅草公園を遊びあるいた次に其居を訪うたのは、何でも寒い時の事であつた。当時自分は写真を娯楽の一にしてゐたので、多分はそれらから話が出て、寒月氏が知合である写真術輸入の先頭者である同老人が丁度我等のぶらついてゐる処の道近くにゐるといふところから、尋ねて見ようでは無いかと云はれたまゝに立寄つたのだと覚えてゐる。観音堂から遠く距離らぬところで、家も普通の程度の住居であつた。会つて見ると、もう可なりの老人で、成程日本写真術史の初頭のページに出て来るべく相応の様子合であつた。顔も頭も大きい方で、軀幹も寧ろ大きい方と見えて、取立てゝ云ふべき特相も無かつたが、年をとつて構わぬからでも有ろうか、何だかモーツとした人であつた。挙動も弛緩で、声言言語も量気を帯びてゐるほど、既に老人状態を現はしてゐた。それでも写真術初頭の談を仕懸けると、雑然という（※いろいろ）の談をしてくれたが、それ等は既に伝へられてゐるほかに耳新しいことも無かつた。然し其の当人から当時の事を聞くので流石に其人の当初の心境に引付けられて微笑まるることも度々であつた。やがて古い写真機を見せてくれた。但しそれはグロテスクな、不体裁で、且つ不便らしいものであつたから、思はず知らずに笑の催さるゝものであつた。自分の年若な余りに掩へなかつた其の感情を見て取つた老人は一寸不機嫌になつて、今は今で精巧なものも出来たが、昔は昔で、これでも大骨折であつたのだ、といふ意味のことを言つた。もつともである。自分は直に昔の物と人との同情した。それから談話は進んだ。自分もこれも写真術史の初編に出づべき柳河春蔭や、又最も早く写真利用の功を遺した蝸川式胤やの事に就て問ひたいと思ふ意が口先まで上つて来たが、それは問はずに終つた。寒月氏は画をかくので、老人の浅草絵に就て談した。老人の画は然まで人を引付けるものでもなかつた。老人の余技はいろいろ（※いろいろ）あつた。いろいろ（※いろいろ）の事をする人であつた。然し自分が会つた時には老衰期末に入つてゐたので、其後は一二度寒月氏の宅で会つたかと思ふ位の事で、勿論訪問して老人を煩わしめなかつたので、ただ其の蓮のまる彫りの長い杖を突いて歩いてゐるおもかげを記憶するにとゞまつた。」と記して晩年の蓮杖の様子を述べている。(森重和雄)